

後に3代目顧問となる竹村先輩、工藤先輩（26回）が卒業した1974年。投擲で前年もインターハイ出場をはたしていた石橋（鈴木）利之先輩が砲丸投げで見事入賞した。その翌年、今度は春高に新たな波が到来の兆し。30回の奥谷正伸さんや鈴木幸雄さんらの入学だ。インターハイトラック種目は、大木正美先輩以来10年以上入賞を逃していた春高にとり、全国の決勝を狙うチャンスが巡ってきたのだ。

★関東で常に総合3位以内の時代

1960年代まで春高は関東で8回総合を獲っている。これは神がかり的な強さである。学校数、競技人口が爆発的に増えた1970年代も春高の記録は年々向上し、代々の先輩たちも県大会でも立派な戦績を残していた。

- | | | |
|------------|------------------|---------------|
| 1976年（29回） | 畦上恭彦、高野能弘（4代目顧問） | 関東総合2位（1点差） |
| 1977年（30回） | 奥谷正伸、鈴木幸雄 | 関東総合2位（0.5点差） |
| 1978年（31回） | 大塚寿（5代目顧問）石橋育朗 | 関東総合3位 |

やはりスター選手の多かった関東大会。同時期には全国総合を獲った行田や水戸工業などがしのぎを削っていたのだ。



高野先生（29回）の代は、関東総合優勝までわずか1点差まで肉薄した。その後1996年より顧問として赴任。熊谷太郎らを配し、奥谷さん（1977年）以来となる19年ぶり関東マイル制覇を成し遂げた。新聞にも「春日部高校が19年ぶり」と紹介された。

5代目顧問 大塚寿先生（31回）は、自身も5種混成の春高記録保持者。後藤秀夫さん（17回）の記録（当時高校記録）を14年ぶりに書き換えた。砲丸で15mを超え、高跳びでも1m93cmを跳ぶ。インターハイは準優勝。砲丸のトレーニングは先輩の大川寿さん（14m94）鈴木幸雄さん（15m91）らに「春高伝統芸」として厳しく指導され、ついに15m超えが成せたという。写真は2005千葉総体。



★400mH高校新記録 大会新記録

2年生にして奥谷さんは関東で個人とリレーで4種目、鈴木さんは砲丸円盤でインターハイ出場を決めている。(このとき3年生の高野さんは円盤で関東3位)

当然3年生になった1977年岡山総体では表彰台を狙う。

3年時の第30回関東大会では奥谷さんが400m、400mH、1600mRで優勝。400mRは2位。こと400m決勝には春高が有田さん大沢さんと3人全員入賞を果たした。鈴木幸雄さんも見事に投擲2冠。大塚寿さんも混成で6位。

当時400mHの高校記録は52秒7(長尾選手 岡山工)。インターハイ大会記録は53秒57であった。54秒を切れば優勝という時代が続いていた時代であった。

しかしふたを開ければ大記録が連発した。

昭和52年「岡山インターハイ」での奥谷選手(高30回)の活躍



▲8台目のハードルでのトップ争い。左から3位奥谷正伸(春日部)53秒48=大会新, 6位古畑孝浩(松商学園), 2位磯辺隆之(都文京)53秒30=大会新, 1位林和幸(指宿商)51秒96=全国高校新, 5位山内淳一(会津)

3位の奥谷さんは53秒48の大会新記録。

優勝の林選手は51秒台に突入する51秒96の高校新記録であった。



▲表彰。右から 2位磯辺隆之、1位林和幸、
3位奥谷正伸、4位尾県貢、
5位山内淳一、6位古畑隆浩

高校生の400mHは歩数、タイミングがうまく当たると大記録が生まれることがある。永久に破られないのでは・・・と、いわれている現高校記録の為末大選手の49秒09も地元国体で、かつ初の400mHでのもの。従来の記録を1秒更新し、シニアの日本記録に迫った。衝撃的な高校新記録であった。彼は中学時代は100mから幅跳び、砲丸までどんな種目でも国内トップもしくは相応の記録が出せるスーパーマン。

日本人高校生として初の400m45秒台の力もあれば、あの大記録も納得がいく。

第30回全国高校対抗選手権大会

400 ⑤49.09 奥谷 正伸

400H③53.48 奥谷 正伸

砲丸投 ④15.78 鈴木 幸雄

円盤投 ⑦44.72 鈴木 幸雄

岡山インターハイは4種目決勝進出、3種目入賞というすばらしい結果に終わった。
400m、400mH、砲丸投げの春高新記録保持者の誕生だった。

★春高400mHの伝統

その後も1981年の横浜インターハイで佐川先輩が53秒21で3位。
同期の石塚先輩は大学時代に日本選手権5位にまで上り詰めた。



1987年には鳥海（40回）が北海道インターハイ6位。

自己ベストの53秒06は、春高記録として2005年に奥岡に更新されるまで18年を要した。竹村監督初の全国入賞となった鳥海は竹村会のメンバーとして欠かせない存在だ。

その40回森丘、鳥海の飛躍した北海道インターハイは、気温16度の寒さの中開催された。しかし心はすでに翌年の神戸インターハイへ熱く燃えたぎらせる一人の後輩がいたことを、この時はだれも気が付いていなかった。



「竹村・鳥海」は尊敬と信頼にあふれる素晴らしい師弟関係である。